

## 子宮頸がんワクチンについての説明、あだち小児科の考え方

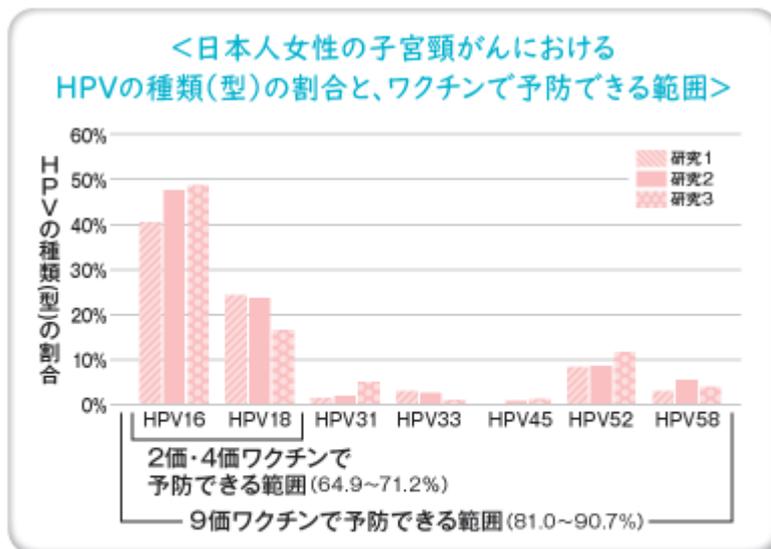
子宮頸がんはヒトパピローマウイルス HPV に感染する事でガンが発症するとされ、性交経験のある女性の過半数は一生に一度は感染の機会があると言われています。ヒトパピローマウイルス (HPV) は、皮膚や粘膜に感染するウイルスで、200 以上の種類があります。粘膜に感染する HPV のうち少なくとも 15 種類が子宮頸がんの患者さんから検出され、「高リスク型 HPV」と呼ばれています。

これら高リスク型 HPV は性行為によって感染します。しかし HPV に感染しても 90%の人は免疫力でウイルスは自然排泄されますが残り 10%の人は HPV 感染が持続します。持続的に感染の状況が継続すると子宮の入口、頸部の粘膜に前がん病変が形成され数年以上かけて子宮頸がんに行進します。

感染の原因となる性交渉を行う年齢の前にウイルスに対する抗体をつける事で HPV に感染することなくガンの発症を予防するためのワクチンが HPV ワクチンです。

現在使用している 9 価ワクチン接種により、子宮頸がんをおこしやすい種類である HPV16 型と 18 型の感染を防ぐことができます。また、子宮頸がんの原因となるウイルスの 80-90%を防ぎます。ワクチンはすべての高リスク型 HPV の感染、ひいては子宮頸がんの発症を予防できるわけではないため、早期発見・早期治療のために子宮頸がん検診を 20 歳から定期的に受診し、子宮頸がんに対する予防を行うことが大切です。ワクチンの子宮頸がんの予防効果は 8 割以上との事です (ワクチンメーカー資料より)。

HPV ワクチンを接種することにより、子宮頸がんの前がん病変を予防する効果が示されています。一定の間隔をあけて、同じワクチンを合計 2 回または 3 回接種します。接種するワクチンや年齢によって、接種のタイミングや回数が異なります。1 年以内に規定回数の接種を終えることが望ましいとされています。



「9価ヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチン ファクトシート」(国立感染症研究所)をもとに作成  
研究1:Onuki, M., et al. (2009). Cancer Sci 100(7): 1312-1316.  
研究2:Azuma, Y., et al. (2014). Jpn J Clin Oncol 44(10): 910-917.  
研究3:Sakamoto, J., et al. (2018). Papillomavirus Res 6: 46-51.

HPV ワクチンは筋肉注射であるため、注射部位の一時的な痛みは 9 割以上、一過性の発赤や腫れ、接種部位の筋肉痛などの局所症状は約 8 割の方に生じます。そのような症状はおおよそ 1 週間を目途に改善していくと考えられます。

10%程度の方に頭痛、1%未満の方に四肢痛、筋骨 格硬直、四肢不快感、関節痛、筋肉痛の報告があります。アナフィラキシー症状の出現は平成 23 年から令和 3 年までの間に数例となっております。(推計 300 万人に対し)

関連性があると考えられた主な副反応のまとめは以下となります。

- 頻度 10%以上：注射部位の痛み・赤み・腫れ
- 頻度 1～10%未満：発熱、注射部位のかゆみ・出血・不快感、頭痛
- 頻度 1%未満：注射部位のしこり、手足の痛み、筋肉が硬くなる、下痢、腹痛、白血球数増加
- 頻度不明：無力症（上まぶたの下垂、物が重なって見えるなど）、寒気、疲れ、だるさ、血腫、気を失う、体がふらつくめまい、関節の痛み、筋肉痛、おう吐、悪心、リンパ節の腫れ・痛み、皮ふ局所の痛みと熱を伴った赤い腫れ、まれに、過敏症反応（アナフィラキシー反応やアナフィラキシー様反応〈呼吸困難、目や唇のまわりの腫れなど〉）

	10%以上	1～10%未満	0.1～1%未満	頻度不明
感染症及び寄生虫症				蜂巣炎
血液及びリンパ系障害				リンパ節症
神経系障害		頭痛	浮動性めまい、感覚鈍麻、傾眠	失神（強直間代運動を伴うことがある）
耳及び迷路障害			回転性めまい	
胃腸障害			下痢、腹痛、悪心	嘔吐
筋骨格系及び結合組織障害			四肢痛、筋骨格硬直、四肢不快感	関節痛、筋肉痛
一般・全身障害及び投与部位の状態	注射部位疼痛(67.8%)、注射部位紅斑、注射部位腫脹	注射部位そう痒感、発熱	注射部位硬結、注射部位出血、注射部位不快感、注射部位内出血、注射部位変色、注射部位知覚低下、注射部位熱感、倦怠感	注射部位血腫、無力症、悪寒、疲労
臨床検査			白血球数増加	

ワクチンを接種した後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動（動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと）などを中心とする多様な症状が起きたことが副反応疑いとして報告されています。この症状は機能性身体症状であると考えられています（何らかの身体症状があり、その身体症状に合致する検査上の異常や身体所見が見つからず、原因が特定できない状態）。ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方はこれらの状態が起きる可能性が高いと考えられています。なお、「HPV ワクチン接種後の局所の疼痛や不安等が機能性身体症状をおこすきっかけとなったことは否定できないが、接種後 1 か月以上経過してから発症している人は、接種との因果関係を疑う根拠に乏しい」と専門家によって評価されています。また、HPV ワクチン接種歴のない方においても、HPV ワクチン接種後に報告されている症状と同じような「多様な症状」を有する方が一定数存在します。

また、様々なワクチン接種後に見られる副反応が疑われる症状は、接種との因果関係を問わず報告を厚生省が管理して定期的に専門家が分析評価しています。その中には、稀に重い症状の報告もあり、具体的には以下のとおりです。

病気の名前	主な症状	報告頻度※
アナフィラキシー	呼吸困難、じんましんなどを症状とする重いアレルギー	約 96 万接種に 1 回
ギラン・バレー症候群	両手・足の力の入りにくさなどを症状とする末梢神経の病気	約 430 万接種に 1 回
急性散在性脳脊髄炎 (ADEM)	頭痛、嘔吐、意識の低下などを症状とする脳などの神経の病気	約 430 万接種に 1 回
複合性局所疼痛症候群 (CRPS)	外傷をきっかけとして慢性的痛みを生ずる原因不明の病気	約 860 万接種に 1 回

（※2013 年 3 月までの報告のうちワクチンとの関係が否定できないとされた報告頻度）

HPV ワクチン接種後に上記のような症状や心配な様子があった際は、厚労省より各地域ごとに経過を観察する拠点病院が決められています。「HPV ワクチンを接種した後に、気になる症状が出たときは、まずは接種医療機関など、地域の医療機関にかかっただけよう願ひいたします」と厚労省から指示が出ているため、症状の種類に合わせて相談拠点病院をご紹介します。

また厚労省が管理する HPV ワクチンを含む予防接種や感染症全般についての相談窓口は電話番号 0120-331-453 です。

以上が当院がまとめた子宮頸がんワクチンの説明となります。

HPV ワクチンの現在の日本の接種率は後進国よりも低い接種率で、かつ、子宮頸がんの発症率は先進国の中ではワースト 1 位だそうです。

日本の子宮頸がん発生率は、世界各国の中で 87 位。調査された 176 カ国のなかでは中央に位置していますが、G7 の中ではワースト 1 位。G20 に入る諸外国と比べて見てもワースト 5 位に位置し、とても高い数値となっています。

HPV ワクチンを積極的に接種した欧州では子宮頸がん発症者が減少しており 2040 年以降に子宮頸がん患者の撲滅が予測されているそうです。

子宮頸がんは唯一予防することができる癌です。

対象年齢の方、対象女児のお母さまお父さま、なにとぞ、子宮頸がんワクチンの接種をしてください。

無料で接種できる期間には限りがあります。

いつか、ではなく、接種するのは今です！！

2024.8.1

あだち小児科 黒岩玲